**技術指導を農家の畑まで**

# 日中専門家らが共同で生態農業を普及

取材　沈湘偉　干光磊

昨日の午前、「中日生態循環型農業新技術普及活動」がわが市において大々的に展開された。本紙の取材によると、この活動には日本からの生態農業技術専門家 12 名と国内の専門家 10 名が招かれているという。主催は市政府で、日本農山漁村文化協会、市科学技術局及び市農林局が共催する。

昨日の午前、日中両国の専門家らは丹徒区の「天成畜禽生態養殖場」、鎮江の「万山紅遍農業園」、丹陽の「嘉賢米業有限会社」等の農業企業を視察した。その際に、専門家らは発酵床養豚、土着菌養鶏、生鮮果樹の立体栽培、合鴨水稲同時作等の生態農業技術の普及状況を高く評価した。取材によると、近年わが市は、野菜の防虫ネット被覆栽培、農畜の高効率連携、パルプ汚泥の開発利用、酢のかすの開発利用等をはじめ、一連の農業生態技術を導入・開発し、生態循環型農業技術の面において、一定の成果を上げている。今回の新技術普及活動は、わが市の現代農業の発展を一層促進するものとなる。

昨日午後の開幕式では、南京林業大学教授・中国科学院アカデミー会員の張斉生氏は「バイオマスの高効率・無公害の資源化利用技術及び応用」、日本人専門家の熊澤喜久雄氏は「日本における環境保全型農業の発展と資源循環」について、基調講演を行った。

また、両国の関係者らは「減農薬の果樹病虫害予防技術」、「天敵利用及び害虫抑制技術」、「健康な乳牛の飼養技術」「堆肥づくり及び良質多収量キュウリの栽培方法」等、五つの協力プロジェクトについて調印書を交わした。今日も新たに調印するものがあるという。一方、日本人専門家らは 5 つのグループに分かれ、句容、丹陽、丹徒等各地の村に出向いて、農家の庭先、田・畑で技術普及と現場指導を行う予定である。

取材によると、この活動を通じて、さらに新たな生態循環型農業技術がわが市に紹介・導入・普及される見込み。

（京江晩報　2008 年 7 月 5 日）